Born 近似の適用範囲について考える.式 (??) より、一般に散乱振幅は、

$$f(\theta) = -\frac{1}{4\pi} \int e^{-i\mathbf{k'}\cdot\mathbf{r}} \frac{2m}{\hbar^2} V(r)\psi(\mathbf{r}) d\mathbf{r}$$
(0.0.1)

と書けるのであった. また式 (??) より、散乱の波動関数は、

$$\psi(\mathbf{r}) = \psi_0(\mathbf{r}) + \int g(\mathbf{r} - \mathbf{r'})V(r')\psi_0(\mathbf{r'}) d\mathbf{r'} + \cdots$$
(0.0.2)

であった. 第1 Born 近似とは、波動関数 $\psi(r)$ を、

$$\psi(\mathbf{r}) \simeq \psi_0(\mathbf{r}) \tag{0.0.3}$$

と近似するのものであった。第1 Born 近似が十分良い評価である,つまり,

$$\int e^{-i\mathbf{k'}\cdot\mathbf{r}} \frac{2m}{\hbar^2} V(r)\psi(\mathbf{r}) d\mathbf{r}$$
(0.0.4)

を正しく評価できるには, $V(r) \neq 0$ なる $r \simeq 0$ で,

$$\psi(\mathbf{r}) \simeq \psi_0(\mathbf{r}) \tag{0.0.5}$$

と近似できる必要がある. $r \simeq 0$ で式 (0.0.2) の第 1 項がそれ以外の項より十分大きければ良いから,

$$|\psi_0(0)| \gg \left| \int g(0-\mathbf{r})V(r)\psi_0(\mathbf{r}) \,\mathrm{d}\mathbf{r} \right|$$
 (0.0.6)

となればよい. 整理すると,

$$\left| e^{ikz} \right| \gg \left| \int -\frac{2m}{\hbar^2} \frac{e^{ikr}}{4\pi r} V(r) e^{i\mathbf{k'}\cdot\mathbf{r}} d\mathbf{r} \right|$$
 (0.0.7)

$$1 \gg \frac{m}{2\pi\hbar^2} \left| \int \frac{e^{ikr}}{r} V(r) e^{i\mathbf{k'}\cdot\mathbf{r}} d\mathbf{r} \right|$$
 (0.0.8)

を得る. これが第1 Born 近似が有効であるための条件である.

例題 0.1: 第1 Born 近似の適用条件

球対称ポテンシャルV(r),

$$V(r) = \begin{cases} -V_0 & (r \le a) \\ 0 & (r \ge a) \end{cases}$$
 (0.0.9)

による散乱を考える。Born 近似の適用条件である式 (0.0.8) を用いて、満たすべき条件とその物理的意味を述べよ。

式 (0.0.8) より Born 近似が成立する条件は,

$$1 \gg \frac{m}{2\pi\hbar^2} \left| \int \frac{e^{ikr'}}{r'} V(r') e^{ik' \cdot r'} dr' \right|$$
 (0.0.10)

$$= \frac{m}{2\pi\hbar^2} \left| \int \frac{e^{ikr'}}{r'} V(r') e^{i\mathbf{k'}\cdot\mathbf{r'}} d\mathbf{r'} \right|$$
 (0.0.11)

$$= \frac{m}{2\pi\hbar^2} \left| \int_{\phi'=0}^{2\pi} d\phi' \int_{\theta'=0}^{\pi} d\theta' \int_{r'=0}^{\infty} dr' V(r') e^{i\mathbf{k'}\cdot\mathbf{r'}} r'^2 \sin\theta' \right|$$
(0.0.12)

$$= \frac{mV_0}{2\pi\hbar^2} \left| \int_{\phi'=0}^{2\pi} d\phi' \int_{\theta'=0}^{\pi} d\theta' \int_{r'=0}^{a} dr' \frac{e^{ikr'}}{r'} e^{ikr'\cos\theta'} r'^2 \sin\theta' \right|$$
(0.0.13)

$$= \frac{mV_0}{\hbar^2} \left| \int_{r'=0}^a r' e^{ikr'} dr' \int_{\theta'=0}^{\pi} e^{ikr'\cos\theta'} \sin\theta' d\theta' \right|$$
 (0.0.14)

$$= \frac{mV_0}{\hbar^2} \left| \int_{r'=0}^a r' e^{ikr'} \frac{e^{ikr'} - e^{-ikr'}}{ikr'} dr' \right|$$
 (0.0.15)

$$= \frac{mV_0}{\hbar^2 k} \left| \int_{r'=0}^a \left(e^{2ikr'} - 1 \right) dr' \right|$$
 (0.0.16)

$$= \frac{mV_0}{2\hbar^2 k^2} \left| e^{2ika} - 1 - 2ika \right| \tag{0.0.17}$$

を得る a . これを低エネルギー散乱と高エネルギー散乱に場合分けして見積もる. 式 (0.0.17) の絶対値の中では,ka がまとめて 1 つの変数のようになっていることに注意する.また,式 $(\ref{eq:condition})$ で定めた κ の定義と, $\kappa \to k$ と書き換えたことより,

$$ka = \frac{\sqrt{2mE}}{\hbar}a\tag{0.0.18}$$

であるから、ka はエネルギーの1/2乗に比例することに注意する.

1. 低エネルギー散乱 (ka ≪ 1)

式 (0.0.17) の絶対値の部分を近似すると,

$$\left| e^{2ika} - 1 - 2ika \right| = \left| \left(1 + 2ika + \frac{1}{2} (2ika)^2 + \dots \right) - 1 - 2ika \right|$$
 (0.0.19)

$$\simeq \left| \left(1 + 2ika + \frac{1}{2} (2ika)^2 \right) - 1 - 2ika \right|$$
 (0.0.20)

$$=2k^2a^2\tag{0.0.21}$$

となるから、Born 近似の適用条件は

$$1 \gg \frac{mV_0}{2\hbar^2 k^2} 2k^2 a^2 = \frac{mV_0 a^2}{\hbar^2}$$
 (0.0.22)

である. 式 (0.0.22) において, m と \hbar は定数であるから, ポテンシャルの大きさ V_0 または半径 a が小さい時に近似が有効であることがわかる.

2. 高エネルギー散乱 (ka ≫ 1)

式 (0.0.17) の絶対値の部分を近似すると, $ka \gg 1$ の領域では, $|e^{2ika}| \simeq |-1| \gg |2ika|$ であるから,

$$|e^{2ika} - 1 - 2ika| \simeq 2ka$$
 (0.0.23)

となる. よって Born 近似の適用条件は,

$$1 \gg \frac{mV_0 a}{\hbar^2 k} = \frac{mV_0 a}{\hbar \sqrt{2mE}} \tag{0.0.24}$$

である. 式 (0.0.24) を見ると, $k \to \infty$ に対して近似が成立することがわかる. つまり, Born 近似は高エネルギー粒子に対して常によい近似であることがわかる.

^a授業中の教員の発言:「試験に出そうな計算.」